

2021年9月NHK東北地方放送番組審議会

9月のNHK東北地方放送番組審議会は、16日(木)、NHK仙台拠点放送局において、9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、2021年度後半期の国内放送番組の編成について説明し、2022年度の番組改定と合わせて意見交換を行った。

続いて、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、10月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	佐藤勘三郎 (株式会社ホテル佐勘 代表取締役社長)
副委員長	南條 和恵 (仙台大学柔道部女子監督)
委員	丑田 香澄 (一般社団法人ドゥーラ協会 理事)
	佐藤 多恵 (シンガーソングライター)
	武田 靖子 (株式会社ジョイン 専務取締役)
	松沢 卓生 (株式会社浄法寺漆産業 代表取締役)
	宮川 宏 (河北新報社 論説委員会委員長)

(主な発言)

<「2021年度後半期の国内放送番組の編成」および

「2022年度の番組改定」について>

- 東京2020パラリンピックが終わると、パラスポーツについて、露出がほとんどなくなってしまった。大会期間でなくても、パラスポーツの定着に繋がるような番組があると、今後のパラリンピックにとっても一助になると思う。また、SNSの普及で、よりさまざまな情報発信の形が生まれているが、テレビでの情報発信というのは今なお影響力が大きい。NHKで地域情報が全国へ発信されるのは、私たち地域の人にとって非常にうれしいことなので、引き続きお願いしたい。
- 2021年度後半期に始まるBS1での新番組『スポヂカラ!』に期待している。中学生や高校生などの若者を見ていると、コロナ禍でやる気をそがれていると感じることがあるため、4月以降についても、「未来に向けて頑張ろう」「この番組に出てみたい」など、若者や子どもたちが将来に希望が持てるような番組編成を考えてほしい。

(NHK側)

頂いた意見は、今後に生かしていくように検討したい。

<放送番組一般について>

- 9月10日(金)の東北ココから「定置網漁師たちのひと夏～岩手釜石市唐丹～」(総合 後 7:30～7:57)を見た。定置網漁の仕組みをアニメーションで紹介しているのが分かりやすかったし、震災から現在に至るまでの流れや、環境の変化に伴う悩みや挑戦など漁師の日常生活の裏側まで密着しており、内容的にバランスがよく肩ひじ張らずに視聴できた。一方、意外性がもう少しあるとさらにおもしろい番組になったのではと思った。また、現状の収入はどうか、若い人の雇用の受け皿になり得るのか、といった一歩踏み込んだ部分や、IT技術を取り入れた定置網漁の仕組みなど、未来に向けた取り組みの部分も知りたかった。今後も、定置網漁のさらなる変化・進化を取材して伝えてほしい。
- 9月10日(金)の「東北ココから」を見た。定置網漁について知らないことが多かったが、地元で長く行われている共同的な漁法で、漁師だけではなく、集落の人々もとても定置網漁に期待しており、地域をあげて取り組んでいるというのがよくわかる番組だった。何気ない日常や仕事風景を切り取った内容だけでも、地元なのに知らなかったことがたくさんあった。農村漁村の取材というのは、何十年後かには貴重な記録になるのではないかと感じている。「よみがえる新日本紀行」もそうだが、30年40年たって変わってしまったものと、残っているものがあり、それを対比して見るのがとてもおもしろく、昔の記録が残るといのは保存記録として貴重だと思った。
- 9月10日(金)の「東北ココから」を見た。最初の場面で、「不漁」とか「三陸の海に何が起きているのか」などのテロップが出たので、非常に困っている漁師たちの話を描いたのかと思ったが、必ずしもそういう内容ではなく、若干ギャップを感じた。
- 9月10日(金)の「東北ココから」を見て、地域全体で前に進んでいこうとする姿に感銘を受けた。環境の変化にもめげずに、明るく前を向いて苦境を打開し、未来を切り開こうとするたくましい漁師の姿をありのままに伝えていたが、ほかの分野に通じる面もあり共感できる内容になっていたと思う。
- 7月17日(土)のNHKスペシャル「伊藤美誠 再生の旅」(総合 後 9:00～9:49)をみて、伊藤美誠選手がスポーツ大国である中国に1人乗り込んでいき試合をする姿はたくましく、本当にすごい選手だと思った。東京オリンピックの開催に反対という声が増えていく中で、通常なら応援されるはずの日本代表の選手たちには、不安や苦

悩が襲っていたと思う。オリンピックについて何か言うことで批判されることもあったかもしれないが、「オリンピックをやらせてほしい」というメッセージも番組から伝わってきて、本当にすばらしいドキュメンタリーだった。

- 8月14日(土)のNHKスペシャル「銃後の女性たち～戦争にのめり込んだ“普通の人々”～」(総合 後 9:00～9:49)は、普通の女性たちが戦争にのめり込んでいった過程を、その子どもの証言や残された記録からたどった番組だった。当時の女性が置かれた立場や集団心理が国防婦人会の活動の原動力になっていて、特に集団心理という面では、新型コロナウイルス感染拡大の影響が広がる現代社会に通じるものもあり、戦争を扱いながら現代的なテーマも含んでいて非常に見応えがあった。当時の女性たちは個人としての自由が制約されていたため、国防婦人会で活動することは社会に出る一つのきっかけになっていて、国のためという使命感と社会に出られるという開放感が女性たちを後押ししたということが分かった。家にある金属を供出する際も相互の監視機能が働いていたという点は、コロナ禍の自粛を求める風潮にも相通じるものがあると感じた。当時と今とで、時代の空気や人間の心理が、似通っている部分もあると制作者も感じていたのだと思う。非常に今日的な番組だった。
- 8月11日(水)の職場遺産～倉庫にねむる宝探し～「大手電機メーカー」(総合 後 7:30～7:57)は、電機メーカーの倉庫に眠っていた過去の製品から、現在への教訓を探るおもしろい番組だった。ベテラン社員から新入社員まで、それぞれの年代で、過去の製品から感じとる教訓が違ったのも興味深かった。先人の商品開発秘話からヒントをつかみ、現代に活かそうというメッセージは共感できた。印象に残ったのは営業担当者の「1対1で顔を突き合わせて何を困っているのかを聞いてものづくりに反映する」ということばだった。この番組は、古きを訪ねながら、戦後の復興・発展を豊かな発想と粘り強さで実現した人々の熱い思いを現代に伝えていると思う。今後も人々を鼓舞するメッセージを届けてほしい。
- 8月12日(木)の「#あちこちのすずさん～教えてください あなたの戦争」(総合 後 7:33～8:45)は、取り上げられたエピソードや切り口、アニメーション中心の伝え方がとてもわかりやすく、子どもたちや、周りの人に薦めたいと思える番組だった。全国紙やウェブをはじめとしたデジタルメディアとの提携、学生の起用、ハッシュタグでの発信など、制作者の伝えたいという強い思いを感じたが、まだ番組を知らない人が周囲に多いと思うので、さらに地方紙との連携を進め、子どもたちを巻き込みながら、次世代に戦争を伝える入り口として、この企画がさらに広がることを期待する。
- 戦争関連のテーマを扱った8月19日(木)のクローズアップ現代+「封印された心

の傷「戦争神経症」兵士の追跡調査」と、8月22日(日)の目撃！にっぽん「ずっと父が嫌いだった～家族が向き合う戦争の傷痕～」を見た。戦争については今までいろいろな角度から掘り下げてきており、改めて深掘りすることはないのではと思っていたが、今回は非常におもしろい話だった。全く違うところから話が始まるが、この2つの話は戦争神経症というところで、最後にリンクする。30～40年前は、心を病んでしまったと今ほど簡単に言えない時代だった。そのため今だから掘り下げられる番組だったと思う。1966年当時の映像が残っており、改めてNHKはすごいなと思った。

- 9月9日(木)のクローズアップ現代+「その校則、本当に必要ですか？ルール改革の最前線に密着！」を見た。このタイトルからだ、ブラック校則を変えようとする内容にとらえられそうだが、実際は、改革のプロセスからの学びが重要だということ伝える番組だったので、もう少しタイトルを工夫してもよかったのではないかな。民主主義では、多数の意見が絶対ではなく少数の意見にこそ価値があり、それを顕在化させることが大切で、そのことに高校生のうちから気づくことはすばらしいと感じた。校則改革を通して、周りの大人も民主主義について見直す機会になるし、学校以外にも、企業が主体的、自立的な働き方を考える中で、つながることがあると思った。
- 連続テレビ小説「おかえりモネ」を見ている。主題歌がとてもよく、ドラマを繰り返し見ても飽きないよさがある。ドラマの中の音楽も場面に合わせた曲調で、ドキドキしたり、はらはらしたりできるようになっていてすばらしい。また、東京オリンピック・パラリンピックの開催に合わせて、パラリンピックを目指す選手が登場するなど、時勢を取り入れた内容もよかった。ドラマを見て、パラリンピックに興味を持った人もいたのではないかな。そのほかにも台風災害や東日本大震災のことなど、現実社会とリンクする部分が多く、さまざまな面で興味を広げるきっかけになっていると思う。ほかの番組も見たいと思わせる要素がたくさん詰まっていて、とてもよいと思う。
- 8月14日(土)のE TV特集「ひまわりの子どもたち～長崎・戦争孤児の記憶～」を見た。ふだんは仕事で疲れていると、重いテーマの番組は避けることが多いが、見てみると上質な番組だということに改めて感じた。戦争孤児院である向陽寮の存在や、そのありようなど、さまざまなことが明らかになっていく過程を一緒に体験している気分になった。特に、集団において子どもたちが守るべきシンプルなルールを設けて、秩序を持って動けるようにするなど、子どもながらに立派な一つの社会を向陽寮の中に築いていたということが印象に残った。また、番組を通して60年ぶりに戦争孤児たちが再会し、長い時間をあけて戦争と再び向き合うという、当事者の人生においてもきっかけになる番組だったと思う。彼らの会話からは、当事者たちの間にある兄弟

のような慈愛に満ちた関係というものを改めて感じた。悲惨な歴史について語り継いでいくことも大切だが、ひとりひとりの物語を知ること、本質的で普遍的な生き方や見方について考えるよいきっかけになった。内容的には難しいが、子どもを含め、すべての世代に見てほしいと思った。

- 8月14日(土)の「E T V特集」を見た。長崎の戦争孤児収容施設で育った人たちが60年ぶりに再会し、当時を振り返る場面は、脚色のない生のやりとりで、戦争孤児の生きざまが浮かび上がっていた。共通していたのは、戦争孤児として差別と偏見に耐えてきたこと。差別の中で息をひそめて過去を隠し、横のつながりを絶っていく悲しい現実。社会の目が彼らを袋小路に追い込んでいく悲しい実態があり、属性で人を判断する社会の冷酷さを感じた。施設の寮長、餅田千代さんの子どもたちを支え、温かく見守り続ける姿勢に感服した。また、最後の場面で、娘と孫に囲まれて幸せそうな孤児の男性の姿が描かれたのが印象的だった。「平和とは何か？幸せとは何か？」と改めて問いかける内容だった。

- 9月4日(土)のE T V特集 選「カキと森と長靴と」は見たかった番組だった。カキ養殖漁業家の畠山重篤さんの実直で素朴な語り口から、本人の人柄を感じた。また映像についても過剰な演出にならず、ありのままの姿を見せる撮り方がすばらしいと思った。前回の「海辺のまちの花畑」と同様で、ナレーションがないにも関わらず引き込まれ、気仙沼の美しい映像を堪能することができた。全体的に目と耳と感情全体が癒やされる番組で、東北ならではの企画だと思った。初回放送から3年たった今、畠山さんはその後どのように歩んでいるのか、今の気仙沼の姿なども見てみたいと思った。

- 8月14日(土)の「香川照之の昆虫すごいぜ！3週連続！夏休みはカマキリ先生と昆虫祭り 第1週」(Eテレ 後 2:30~4:25)を見た。この番組は、香川さんの無邪気なキャラクターがとてもよく、毎回楽しみにしている。特に、何を伝える番組か、子どもでもすぐに分かるタイトルがすばらしい。NHKの番組の中には、タイトルを見ただけでは内容が分からないものも多いが、タイトルと内容がリンクすることはとても大切だと思う。今は、インターネット上で、誰でも番組を企画、構成、プロデュースできる時代で、動画共有サイトがよく見られているが、タイトルや内容を表す画像が工夫されていて、引きつける力があると思う。テレビは、それらと内容の違いを打ち出していくことが重要だと思う。「昆虫すごいぜ！」は、海外へ撮影に行き普通では見られない珍しい虫を捕まえるなど、ほかではまねできないような内容になっている。NHKでなければできない、誰しもがまねできない内容であれば、テレビを見なくなっている人たちにも訴求できるのではないか。そういった人たちが、もう一度、テ

レビに興味を持つような番組作りを期待している。

- 9月13日(月)の「ワルイコあつまれ」(Eテレ 前 8:25~8:55)を見た。番組告知を一切せず、SNSでの話題作りなど画期的な試みにチャレンジしていて、時代に合う新しい挑戦だと思った。内容も、驚き、学び、遊びにあふれていて、素直に「NHKが攻めている」という印象を持った。子育て世代にとって、子どもも大人も一緒に楽しめて学べる番組が地上波で放送されていることはありがたい。PR戦略はいろいろあるが、子どもが動画共有サイトで、Eテレの「びじゅチューン」を見て魅了され、その話を学校ですることにより、周囲の人たちも「見たよ」という、人づてに広がる現象が起きており、身近な口コミも侮れないと思った。
- 8月11日(水)のドラマ×マンガ「特攻兵の幸福食堂」(BSプレミアム 後 9:54~10:53)は、若い世代も気を張らずに見られるよい番組だった。草笛光子さんの存在感がすばらしく、濱田岳さんなどの人気俳優も起用していたので見やすかった。多くの若い人たちに見てほしいと思える番組だったため、BSだけではなく、地上波でも放送してはどうかと思った。
- 8月13日(金)のレギュラー番組への道「希少誌道(2)」(BSプレミアム 後 11:15~11:44)は、寺の住職向けの専門誌を取り上げていたが、髪の毛を剃るかみそりやバリカンの商品情報、困った総代をうまくやめさせる方法、オンライン法要などマニアックな内容を紹介していて、寺で話題になっていることがよく分かりおもしろかった。そこには、高齢化で広い境内の掃除にロボットを使っている寺や、過疎化で門徒が激減したために、太陽光発電で副収入を得ている寺があることなど、最新の動きや課題もよく分かった。寺の世界を通して今の日本社会が抱える問題の一端も見る内容だった。なかなか多くの人に見てもらうのは難しい面もあるが、有意義な番組だったので、今後も期待している。
- 8月14日(土)と21日(土)の「魔改造の夜」(BSプレミアム 後 10:00~11:29)もおもしろかった。14日は「扇風機 50メートル走」、21日は「赤ちゃん人形 綱登り」と、一見するとくだらないお題に対して、本気で挑む技術者魂を堪能できる番組だった。笑いあり、涙ありの筋書きのないヒューマンドラマで楽しめた。技術開発は、真剣勝負の場だが、遊び心が柔軟なアイデアを生み出し、ブレイクスルーを可能にする。まさに技術開発の神髄を地で行った内容で、引き込まれて見た。番組制作者の遊び心と発想力、構成の巧みさに拍手を送りたい。
- 8月9日(月)の 原爆の日 ラジオ特集「被爆オリンピックが遺したメッセージ」

(ラジオ第一 後 8:05～8:55、9:05～9:55)を聞いた。広島局からの生放送で、ドキュメンタリーとドラマの融合体で内容は非常に興味深かった。ただ、100分という長い番組だったので、後半は間延びしてしまっただけのように感じた。生放送ということで、リアルタイムで投稿された意見を紹介する構成だったと思うが、リスナーにとって答えにくい質問が多く、紹介できるような投稿が少なかったのか、番組内ではほとんど紹介されず、それが原因で時間が余ってしまったのではないかと感じた。100分の生放送はチャレンジであったが、想定通りいかないと感じた。

- 東京2020オリンピックの感想だが、無観客だったこともあり、ふだんは歓声などに消されてしまう色々な音が聞こえてきて、スポーツのダイゴ味というものを新鮮に感じる事ができた。また、復興五輪について、テレビでどのような表現をするのか気になって注目していたが、福島など東北で開催されている競技があったこと以外、あまり復興五輪を感じられなかったため、テレビでの表現は難しいのだなと思った。柔道については、NHKらしく、偏った放送ではなく外国人同士の決勝もしっかり放送していたので、見たいシーンが見られた。一部、解説者が興奮し、応援になってしまっていたところや、審判に対して言及して、見ている人によっては、審判が間違えたのかと思いかねない場面があったので、周囲にはコメントを変えた方がよかったと言う人もいた。一方、新しい種目も平等に取り上げており、オリンピック以降、スケートボードを持っている子どもたちをよく見かけるようになった。今後も、放送によってスポーツを始める子どもたちが増えたらいいと思った。
- 東京オリンピック・パラリンピックに関して、インクルーシブ教育が広がっていて、子どもたちはちゃんとパラスポーツについて理解しており、今はオリンピックの次にパラリンピックがあることが当たり前となっている。会場に観客が入っていたら、観客の表情や盛り上がりなどでまた違った形で伝わったかもしれないと思ったり、少し残念だとも思った。また、特設サイトがとても充実していて、「2分でわかる」のコーナーを見て、振り返り解説や選手たちの名言などで余韻に浸り、長く楽しませてもらった。
- 東京オリンピック・パラリンピック期間の報道について。男子車いすバスケットボールなど、いくつかの競技を夢中になって視聴した。ただ、新型コロナウイルス感染拡大が続く中での開催については、手放しでは喜べない複雑な思いを抱いた。開幕直後の7月25日(日)、東京の新規感染者数は1,700人を超え、日曜として最多を記録したが、この日のNHKニュース7は、アナウンサーの満面の笑顔で始まり、日本人選手が金メダルを取ったことをトップニュースで大きく報じ、新型コロナウイルス関連のニュースは、番組の後半に追いやられた。この状況だからこそ、人々に勇気を

与えつつも、決して行動の緩みにはつながらないような報道の仕方があったのではないかと感じた。競技の中継を放送しながらも、ニュースではしっかりと新型コロナウイルス関連の現状を伝え、人々にもっと強くステイホームを呼び掛けることは可能だったのではないか。「終わったこと」とするのではなく、この間の報道のあり方について客観的視点で振り返ることは、これからの報道について考える上でも、極めて重要だと考える。

NHK仙台拠点放送局
番組審議会事務局